

日本ロレンス協会第 55 回大会プログラム

- ◎日 時： 2024 年 6 月 22 日（土）
◎会 場： 甲南大学 岡本キャンパス 5 号館 2F 524 教室
住 所： 〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1
連絡先： 甲南大学大学文学部 岩井学
Tel: 078-435-2358
e-mail: gaku-i@konan-u.ac.jp

◎交通アクセス：

【新大阪駅から】

- ・JR 摂津本山駅まで約 26 分

【新神戸駅から】

- ・地下鉄→阪急岡本駅まで約 17 分

【伊丹空港から】

- ・モノレール→阪急岡本駅まで約 50 分

☞阪急岡本駅から徒歩 10 分、JR 摂津本山駅から徒歩 12 分

- ◎昼食のご案内：阪急岡本駅から JR 摂津本山の間（徒歩 5 分程度）に飲食店、カフェがいろいろあります。

- ◎宿泊のご案内： プログラム最後に宿泊施設をリストにして掲載しました。

【役員会】

今年度は大会前々日（予定）にオンライン(Zoom)で実施します。

【大会】 6 月 22 日（土） 13：00～

受 付： 12：30～

総合司会： 岩井 学（甲南大学教授）

- ◎ 開会の辞： 会長 石原 浩澄（立命館大学教授）（13：00～）

研究発表

(13:10~14:20)

司会 田部井 世志子 (北九州市立大学名誉教授)

『白孔雀』の絵画性

大江 公樹 (早稲田大学大学院生)

司会 高村 峰生 (関西学院大学教授)

“Men in Love” 再考—初期草稿から *Women in Love* へ

近藤 康裕 (慶應義塾大学准教授)

*休憩 14:20~14:30

シンポジウム

(14:30~17:00)

日本における初期のロレンス受容をめぐって

司会 石原 浩澄 (立命館大学教授)

ロレンスへの視線、自文化への視線

講師 浅井 雅志 (京都橘大学名誉教授)

福田恆存のロレンス受容と展開

講師 新井 英永 (熊本大学教授)

「ロレンスを受容したリーヴィス」の受容

講師 石原 浩澄 (立命館大学教授)

*休憩 17:00~17:05

◎ 総会 (17:05~17:35)

◎ 閉会の辞: 副会長 木下 誠 (成城大学教授)

◎ 懇親会 (18:00~20:00)

場所: PRONTO 甲南大学 iCommons 1F

会費: ¥5,000 (大会当日受付でお支払ください)

『白孔雀』の絵画性

大江 公樹

『白孔雀』(*The White Peacock*)は、出版当初『スタンダード』(*Standard*)をはじめとする諸文学雑誌でも評された通り、人物造形等においては優れる一方で、物語の構成においてまとまりに欠けてゐる。この断片が連続してゐるやうな構成故に、多くの読者は本作品について、物語の舞台ネザーミアの風景とそこでの人間模様の、云はばスケッチを次々に見せられてゐるやうな印象を持つのではないだろうか。本作品のタイトルが当初は「ネザーミア」(*Nethermere*)であつたといふのも、本作品がもつ絵画性の一端を示してゐよう。本発表は、『白孔雀』が持つ絵画性に着目し、本作でロレンスがどのやうな「絵」を描かうとしてゐたのか、その「絵」を通じて作家のどのやうな姿勢が読み取れるのかを検討する。

考察に際しては、Jack Stewart が“Landscape Painting and Pre-Raphaelitism in “The White Peacock””(1997/1998)と“Landscape and D. H. Lawrence” (2019) で示したラファエル前派をはじめとする西洋絵画の伝統にロレンスを位置づけた研究を踏まへつつ、柄谷行人が『日本近代文学の起源』で表した西欧絵画・文学における「風景」についての論を援用したい。その上で特に、『白孔雀』における一人称といふ形式の問題、また「風景」とそれを描き表す側の主観との緊張関係のあり方について明らかにする予定である。

“Men in Love” 再考——初期草稿から *Women in Love* へ

近藤 康裕

Women in Love というタイトルは、この小説の内容の半面しか表していないため奇妙な印象を与える一方、それゆえに多くを物語っているとも言える。テキストが最も熱を帯び、展開される観念がその異様さとともに力強さを見せるのは“Men in Love”と呼ぶのが相応しい場面であるにもかかわらず、そう題されてはいないからである。初稿の段階で“*The Sisters*”と呼ばれていたのだからこれは奇とするに足りないと言うことはできようが、全篇にわたって男性の男性に対する欲望を問題とした小説が敢えて“*Women in Love*”と呼ばれねばならなかったのには不可避の考察すべき意味があり、この点が小説の評価に大きくかかわってくるはずである。本発表では、1913年に書かれた *The Sisters I* の断片から1916年の執筆になる Prologue、*The First ‘Women in Love’* として出版されている1916年の草稿、最終版の *Women in Love* までを比較し、“Men in Love”にかかる表現の主要な変化をたどりながら、それが作中頻出する dissolution や corruption のイメージとどのように関連するのか、この小説が提示しようとしたのはいかなる“Love”なのかを検討する。そのうえで、改稿によってもたらされた変化と最終版をどう評価できるか再考してみたい。

シンポジウム

日本における初期のロレンス受容をめぐって

司会 石原 浩澄

日本ロレンス協会の全国大会は今年度で55回をかぞえる。その第1回大会は、元日本ロレンス協会会長 吉村宏一同志社大学名誉教授の回想録によれば、1970年7月に京都にて開催された。わが国におけるロレンスへの関心は作家生前の時期から始まっていて、1922年にはロレンスへの最初の言及もみられるという。ロレンスの日本への紹介から1世紀以上、協会の設立から半世紀以上を経過した今日、わが国におけるロレンス受容の歴史に目を向けることには意味があるのではないかと、この認識から本シンポジウムは企画された。「ロレンス批評史」といえば、さまざまな批評形態・批評理論の変遷をたどりつつ、ロレンスのテキスト解釈の歴史にせまる研究は、これまでも国内外で行なわれてきたが、今次シンポジウムでは、わが国における、比較的初期のロレンス受容に目を向ける。わが国におけるロレンス研究・ロレンス受容の源流に近い部分に注目することは、ロレンス批評史の一端の検証というだけでなく、「なぜロレンスか」という問題意識を喚起することにもつながるものと期待したい。フロアの参加者それぞれのロレンス批評史ヴァージョンと照らし合わせながら、共同討議の素材提供となればと願っている。ただし、以下講師それぞれの報告要旨からも察せられるように、本シンポジウムは、時系列的・体系的に初期の受容を扱うものとはならない。論者の関心に沿ったロレンス批評を取り上げ、その問題関心にかからめながら、初期受容の一端にアプローチできればと考えている。

ロレンスへの視線、自文化への視線

浅井 雅志

受容史とは畢竟、生きた時代に影響を受けつつ自己を形成した読者や研究者が、ロレンスの作品という同一のものをどう読み、評価したかの継続の歴史である。時代の変遷と、その中での読者の形成史が多様であるのに連動して読みも多様になる。しかしそこには言語・文化を同じくするという一本の筋が通っている。

欧米のロレンス研究にはロレンスを批判的に見る流れがあるが、増口充によれば、日本は「世界で最も早くから、最も多くのロレンスの作品を移植し、親しんで」きており、「初めから正確なイメージでとらえられたロレンスは「幸運児」だったと言う。本論では、初期のロレンスの否定的、肯定的読解の検討を通して、日本でのロレンス受容がどれほど「正確」であったかを検討してみたい。

土居光知(1886-1979)は早くも1936年に『ロレンス一人と作品』を出している。土居の注目点の一つはロレンスの性意識と作品でのその扱いで、「ロレンスの性の問題は、情愛の問題ではなく、人間の本能的な健康さを回復する問題である」ときちんと勘所を押さえながら、彼は「性の問題にとりつかれ」ており、「彼の不健全さは同時に時代の不健全さ」で、それゆえに彼は象徴的人物の一人となったと言う。彼の読解の最大の特徴は伝記的事実の作品への

不用意な適用で、自己の人生に不如意であったロレンスが、自己正当化と一種の意趣返しから作品を書いたという、実に暗澹たる評価を下す。

チャタレー裁判で土居と共に検察側から登壇した斎藤勇（1887-1982）は、ロレンスは「人妻を奪った点において性格に欠陥がある、不義は道徳の悪い影響を与える」（143）という言葉に典型的に表れているように、土居と同じく伝記的事実を読解に適用し、まず作家自身を評定し、その上で、西洋人以上に厳格なキリスト者としてロレンスを裁断するという、きわめて劣悪な批評を述べる。1974年に出た『イギリス文学史』（1957年版の増訂版）でも、ロレンスは「normalなもの（例えば理性や知力）を疎んじて、異常なものを極度に重要と考えたのである。[.....]体力の衰弱とともに生殖に対する狂わしい熱望に襲われた。そのために彼の小説は性格描写に重きをおいたものではなく、自己主張的」となると、裁判時の見解を変えていないどころかさらに悪化している。

二人の否定的なロレンス受容と対蹠的なのが寺田建比古（1916-2008）である。彼の特徴は、ロレンスは「人間存在の〈宇宙性〉の唯一人の偉大な復興者、20世紀の地平を大胆不敵に遙かに踏み越えた唯一人の言語芸術家、根源的思索家、預言者」だとする極度の特別視にある。多数の西洋思想家や宗教者への言及と比較考察を駆使したこの重厚な力技は、同時に、断定的言辭が全編を蔽っていて、自分とは違う読み、あるいは接近法を取る者には仮借ない糾弾を加えるという特徴を持つ。

以上、初期のロレンス読解の両極端を比較検討しつつ、日本におけるロレンス受容の一側面を明らかにしてみたい。

福田恆存のロレンス受容と展開

新井 英永

思想家・福田恆存（1912-1994）にとって、D・H・ロレンスは特別な存在である。東京帝大英文科に在籍していた福田が1935（昭和10）年に提出した卒業論文は『D・H・ロレンスに於ける倫理の問題』であり、戦中には『黙示録論（アポカリプス）』、戦後には『恋する女たち』等を翻訳する一方、チャタレー裁判の特別弁護人を引き受け「チャタレー裁判最終弁論」を書いている。

福田のロレンス受容は全般的であると言えようが、その中核を成すのは『黙示録論』であろう。戦後間もない回想によると、戦争当時「個人抹殺の暴力」の脅威を感じていた福田にとり、唯一の抵抗がロレンス『黙示録論』の訳出・出版であった。結局、戦争中に出版が許可されることはなかったが、戦後の1951（昭和26）年『現代人は愛しうるか』というタイトルで白水社から刊行される。その前書で、福田は次のように述べている。「これはロレンスが死の直前に書いたもので、かれの思想のもっとも凝縮された表現である。のみならず、人間を造りかえる力をもった書物というものは、そうめったにあるものではないが、この『アポカリプス論』はそういうまれな書物のひとつである。すくなくとも、ぼくはこの一書によって、世界を、歴史を、人間を見る見かたを変えさせられた。」

福田は近年再評価される傾向にあるが、従来の評伝であれ、今日の研究書であれ、ロレンスに言及のない福田論はまれであろう。一方、日本のロレンス研究においては、伊藤整や西村孝次に比べ、福田恆存という存在が注目されることはそれほどなかったように思われる。本報告では、福田にとってロレンスが持った意義を「近代」や「近代の超克」といった観点から改めて確認し、福田による『黙示録論』を中心とするロレンス論再評価の可能性を探ってみたい。

「ロレンスを受容したリーヴィス」の受容

石原 浩澄

わが国における比較的初期のロレンス研究・批評に目を通すと、「『小説家 D.H.ロレンス』によって）ロレンスが真に偉大な天才として認められるようになった」とか、「... とリーヴィスも言っているように...」に類する文章は散見する。このような発言は当時の研究では当然のこととして、今日では特に注目されないかもしれないが、少し見方を変えれば、これはわが国のロレンス研究、特に比較的初期の受容史における F.R.リーヴィス (1895-1978) という批評家の存在の大きさを物語るものでもあろう。そこで、本報告では、前 2 者の講師とは少し視点を変えて、ロレンスを受容したリーヴィスをわが国のロレンス研究がどのように受け取ったのかという観点からロレンス受容の側面を考えてみたい。

初期のロレンス評価においては、T.S.エリオットによる批判が大きく影響していたことは多くの論者が指摘するところである。このエリオットの影響からロレンスを救うべく論陣を張ったリーヴィス像は今日では確立されたものとなっているが、あらためて当時の議論に向き合うと、エリオットの存在・影響の大きさを改めて実感するとともに、リーヴィスを援用してロレンスを救おうとする研究者たちの熱量にも感慨を新たにす。こうしたよく知られた論点のみならず、どのような議論に絡めてリーヴィスを援用、あるいは批判、受容してきたのか、さらには、ロレンス論の外側におけるリーヴィスの受容などにも目を向けながら初期の批評状況を検討してみたい。

甲南大学岡本キャンパスまでのアクセス

阪急岡本駅から徒歩 10 分、JR 摂津本山駅から徒歩 12 分



岡本キャンパスマップ



※ 523 教室、524 教室は、正門から道なりに進み、右折した 5 号館の 2 階です。

大会会場周辺ホテル情報

甲南大学最寄り駅(阪急岡本駅、JR 摂津本山駅)周辺にホテルはありません。神戸の繁華街、三宮駅周辺に多くのホテルがあります。最寄り駅から三宮駅まで7-10分程度、反対方向の西宮北口駅まで7-10分程度です。最寄り駅から阪急梅田駅・JR大阪駅まで20分程度です。

【三宮駅周辺のホテル】

- ・神戸三宮ユニオンホテル
住所：〒651-0087 兵庫県神戸市中央区御幸通2-1-10 TEL: 078-242-3000
- ・ダイワロイネットホテル神戸三宮
住所：〒651-0087 兵庫県神戸市中央区御幸通5丁目1-6 TEL: 078-291-4055
- ・ホテルモントレ神戸
住所：〒650-0011 兵庫県神戸市中央区下山手通2丁目11-13 TEL: 078-392-7111
- ・神戸三宮東急REIホテル
住所：〒651-0096 兵庫県神戸市中央区雲井通6-1-5 TEL: 078-291-0109
- ・ホテル ヴィラフォンテーヌ神戸三宮
住所：〒651-0095 兵庫県神戸市中央区旭通4-1-4 TEL: 078-224-5500
- ・東横INN神戸三ノ宮1
住所：〒651-0087 兵庫県神戸市中央区御幸通2-2-2 TEL: 078-271-1045
- ・カンデオホテルズ神戸トアロード
住所：〒650-0021 兵庫県神戸市中央区三宮町3-8-8 TEL: 078-958-6755
- ・ANAクラウンプラザホテル神戸
住所：〒650-0002 兵庫県神戸市中央区北野町1丁目 TEL: 078-291-1121

【芦屋・西宮周辺のホテル】

- ・ホテルリブマックス西宮
住所：〒662-0914 兵庫県西宮市本町5-29 TEL: 0798-26-0440
- ・ホテルユーズ香櫨園
住所：〒662-0951 兵庫県西宮市川西町1-8 TEL: 0798-35-0162
- ・ホテル竹園芦屋
住所：〒659-0092 兵庫県芦屋市大原町10-1 TEL: 0797-31-2341